

「総評」

第七回を迎えた今回も、全部で六百三十二点というたくさんの手紙が寄せられたので、この企画に対する荒川区の子どもたちや保護者の方々の絵本に対する関心が広まっていることを感じ、嬉しくなりました。

絵本は、言葉の発達が不十分な幼い子どもたちだけのものではありません。絵本作家は、いろいろと深い意味を持たせて、絵本の言葉を決めたり絵を工夫したりしています。ですから、小学校の高学年や中学生になってから、絵本を読み返すと、幼いころに読んだときとはずいぶん違う印象を受けたり、気づきが生れたりするものです。人生の経験を積むほど、絵本に隠された深い意味を読み取ることができるようになるからです。

大人が絵本を読むことについても、同じことが言えます。大人は絵本のことをもうわかった気になって、ただ親だから読んであげると考えがちですが、感性を敏感にしていますと、子ども

にも読み聞かせしているうちに、子育てや自分の生き方について、大事なことに気づいたり、逆に子どもの反応から子どもの内面や子育ての大事なポイントになることに気づいたりするものです。

今年も、寄せられた手紙には内容のすばらしいものが少なくありませんでした。子どもたちの手紙からは、小学生でもこんなに深いことを感じたり考えたりしているのかと、感動する手紙がたくさんありました。取り上げられた絵本はバラエティに豊んでいますし、子どもたちや保護者たちが気づいたテーマも多様です。手紙一通一通のすばらしさについては、各入選作品に対する私のコメントを、ぜひ読んでください。

書くことは、自分をしっかりと見つめることであり、生きる明日への道しるべを確認する営みでもあります。